

宮崎県日南市における観光の現況と課題—飫肥城下町を中心として—

Tourism in Nichinan-shi in Miyazaki Prefecture: Present Situations and Issues

助重 雄久・井沢 理佳・岩本 藍・大川 かほ莉・酒井 香織・
坂口 奈々子・澤江 陽・道正 紗季・南谷 京佑

SUKESHIGE Takehisa, ISAWA Rika, IWAMOTO Ai, OOKAWA Kahori, SAKAI Kaori,
SAKAGUCHI Nanako, SAWAE Minami, DOUSHOU Saki, MINAMITANI Kyouzuke

I はじめに

宮崎県を訪れる観光客は、高度経済成長期における新婚旅行ブームの到来とともに急増した。とくに宮崎市から鹿児島県志布志市にかけての日南海岸は、「鬼の洗濯板」ともいわれる青島付近の鋸歯状海岸地形や、本州ではあまりみられない亜熱帯植物群落が南国的な景観を醸し出しており¹⁾、多くの新婚カップルが訪れた。

宮崎県が「新婚旅行のメッカ」であった時期には国民所得が倍増し、費用と日数をかけて遠くに行くことが新婚カップルの「豊かさの象徴」となっていたが、1970年代後半以降は「新婚旅行のメッカ」が宮崎からグアム、ハワイへと、より遠くにある南の地に移っていき(森津, 2012)²⁾、宮崎県を訪れる観光客の伸びも鈍化した。

その後宮崎県を訪れる観光客数は、航空路・航路の整備や「シーガイア」の開設などにより1990年代に再び増加傾向に転じたものの、2000年代に入ると減少傾向に転じた。とりわけ2010年以降は、相次ぐ家畜の病害や災害によって観光客が激減した。また、2011年3月の九州新幹線開業で、交通網の高速化からとり残された大分・宮崎県と、九州新幹線開通で関西・中国地方からの交通利便性が向上した熊本・鹿児島県との「東西格差」が鮮明になってきた。

このような状況のなかで、県内でも交通利便性が低い地域に位置する日南市は、2009年にJR日南線の観光特急「海幸山幸」が運行を開始したのを契機に、観光振興に向けたさまざまな取り組みを進めてきた。なかでも、飫肥城下町の「食べあるき・町あるきマップ」や、新・ご当地グルメ「日南一本釣りカツオ炙り重」の提供は開始以来継続的に実施されており、観光客の来訪を促進する存在になりつつあると考えられる。

本研究では上記の点をふまえたうえで、日南市、とくに飫肥城下町における観光の現況を、観光客に実施した聴きとり調査の結果をもとに考察していく。さらに「日南一本釣りカツオ炙り重」や「食べあるき・町あるきマップ」等への取り組みについても考察し、それらが観光客にどのように評価されているのかを明らかにする。また、「食べあるき・町あるきマップ」については、取り組みに参加している店舗からも意見を聴取し、観光振興に向けた課題を検討する。

II 新婚旅行ブーム以降における宮崎県の観光動向

宮崎県の観光動向に関する概略については前章でも述べたが、ここでは新婚旅行ブーム以降における観光客総数、県外客数、観光消費総額の動向を「宮崎県観光動向調査」をもとに考察してみよう。

年間観光客総数は、新婚旅行ブーム初期の1966年には372万1千人(うち県外客191.4万人)であったが、ブームがピークを迎えた1974年には825万2千人(うち県外客520.2万人)に達した(図1)³⁾。観光消費総額も1966年には63億円に過ぎなかったが、1974年には約7.6倍の479億円に達した(図2)。

観光消費総額は1975年以降も堅調な伸びを示したが、観光客数は新婚旅行ブームが下火になるにつれて伸び悩み、1983年まで800~830万人台で増減を繰り返した。とくに県外客の伸びは鈍化し、1974年の520万2千人を上回ることがないまま昭和の終わりを迎えた。

年号が平成に改元された1989年以降は、観光客総数、県外客数、観光消費総額とも大きな伸びを示した。1989年には観光客総数が1,001万2千人となり、初めて1,000万人を突破した。この時期は日本全体がバブル景気に沸いていたことに加え、日本エアシステム(2006年に日本航空に吸収合併)の東京-宮崎線開設によるダブルトラック化の実現(1989年)、宮崎空港滑走路の延伸による機材大型化、大阪-宮崎カーフェリー航路開設(1990年)など県外との交通の整備が進んだ。この結果、県外客数は1990年に526万5千人となり、新婚旅行ブームのピークを上回った。また、観光消費総額も1993年に1,002億円となり、初めて1,000億円を突破した。

宮崎県では、バブル景気崩壊以降も「シーガイア」のグランドオープン、南郷プリンスホテル開業、川崎-宮崎カーフェリー航路開設、日本航空の東京・大阪-宮崎線開設による東京線トリプルトラック化(1994年)、日本の地方空港では初の空港連絡鉄道開通、青島パームビーチホテル開業(1996年)など、交通や大型宿泊施設の整備が相次いで進んだ。しかし、これらの整備とは裏腹に県外客数が1996年の574万1千人をピークとして減少に転じ、以降、東国原英夫氏が知事に就任した2007年に微増したのを除き、減少の一途をたどった。これに伴い、観光消費総額も1996年の1,174億円をピークとして減少傾向に転じた。

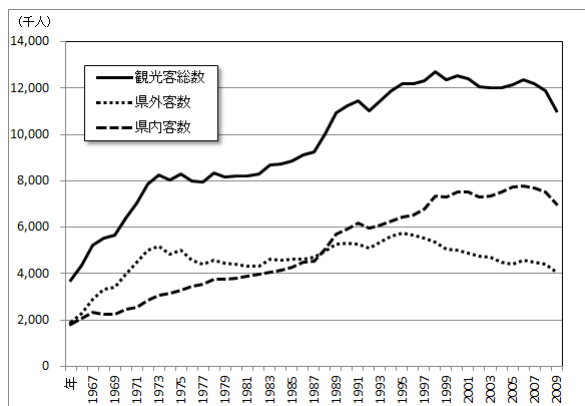


図1 観光客数の動向(1966-2010年)

(「宮崎県観光動向調査」をもとに作成)

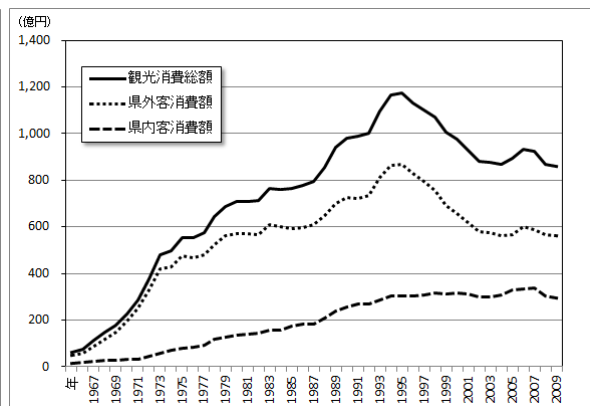


図2 観光消費額の動向(1966-2010年)

(「宮崎県観光動向調査」をもとに作成)

2010年における観光客総数は1,103万5千人で1996年比9.3%減にとどまったものの、県外客数(404万9千人)は29.5%減、観光消費総額(858億円)は26.9%減となった。こうした観光の長期低落傾向は、関連業界だけでなく宮崎県の経済全体にも暗い影を落としている。

Ⅲ 日南市の地域概要と観光の動向

1. 地域概要

1) 自然環境

日南市は、宮崎県南部に位置しており、西は都城市と三股町、南は串間市、北は宮崎市に隣接している(図3)。東は日向灘に面しており、沿岸部は日南海岸国定公園に指定されている。市域は鱒塚山地^{わにつか}の山々に囲まれており、総面積536.1km²のうち78%は山林となっている。酒谷川と広渡川の下流部には平地が広がっており、市街地もこの平地に形成されている。

気候は温暖多雨で、沿岸部にある油津^{あぶらつ}の年平均降水量は2598.7mmに達する⁴⁾。降水は梅雨期にあたる6月(458.9mm)と台風が来襲する9月(313.8mm)がとくに多く、この時期にはしばしば風水害も発生する。一方、年平均気温は18.2℃、年間平均日照時間は1959.8時間で、本州では高知県や紀伊半島南部とともに、もっとも温暖で日照に恵まれた地域とされている。とくに冬季は他の地域に比べ温暖で、最寒月の1月でも平均気温は8.7℃、平均最高気温は13.4℃となっている。冬季の温暖な気候は、早くからプロ野球チームにも注目され、広島東洋カープは1963年から51年間、日南市で春季キャンプを実施している。また西武ライオンズ(現・埼玉西武ライオンズ)も1995年から秋季キャンプを旧・南郷町(現・日南市南郷地区)で開始し、2004年以降は春季キャンプも南郷で実施するようになった。

2) 人文・社会的環境

現在の日南市は、第二次世界大戦後に多くの町村が合併を繰り返して形成された。1950年には飢肥町^{おび}、油津町^{あがた}、吾田町、東郷村が合併し、日南市が誕生した。その後、1955年2月11日には細田町と鶴戸村、1956年4月1日には榎原村の一部と酒谷村を編入した。さらに2009年3月30日には北郷町、南郷町と合併して、現在の日南市が成立した。

日南市には、市制施行前まで二つの中心地があった。その一つである飢肥は、1600年(慶長5)に伊東祐兵^{すけたけ}が関ヶ原の戦いの功績によって所領を安堵され以来、廃藩置県まで伊東氏5万1,000石の城下町として栄えた。「九州の小京都」とも呼ばれる飢肥城下町は、藩政期の地割や景観が大きく改変されないまま残されており、1977年5月18日に八幡通り、横馬場通り、大手門通りなど7つの街路を含む19.8haが国の重要伝統的建造物群保存地区として選定された(図4)⁵⁾。また、飢肥

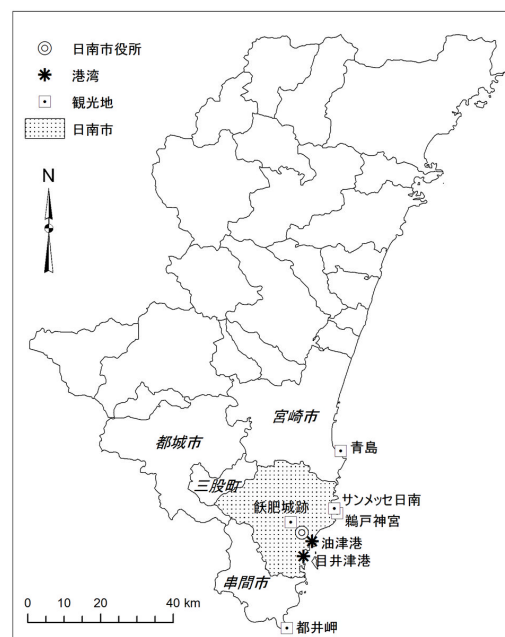


図3 日南市の位置 (助重原図)

は明治期の外務大臣でポーツマス条約に調印した小村壽太郎の生誕地であり、遺徳・功績の顕彰と、国際化に対応できる人材育成や文化活動への寄与を目的とした小村記念館も建てられている。

もう一つの中心地である油津は、飢肥藩の外港として栄えた港町である。藩の財政を支えた飢肥杉は、酒谷川・広渡川と1686年に開削された堀川運河を經由して油津港まで運ばれ、そこから造船業の盛んな播磨地方などに移出されていた⁶⁾。

油津港は、南郷地区の目井津港とともにカツオ一本釣り漁業・マグロ延縄漁業の基地としても知られている。しかし、漁業をめぐる環境は厳しく、日南市にある4漁協(日南市漁協・南郷漁協・栄松漁協・外浦漁協)の組合員数合計は1985~2011年の間に2,251人から729人に減少した。また、水揚金額もマグロ延縄漁業をはじめとするほとんどの漁業部門で年々減少してきた。一方、カツオ一本釣り漁業は2000年以降、水揚金額が80億円台で安定しており、日南市が大部分を占める宮崎県の近海カツオ一本釣り漁獲量(2011年)は、全国の総漁獲量の61%にも達した⁷⁾。

飢肥と油津に挟まれた吾田は水田が広がる農村であったが、1937年に日本パルプ工業飢肥工場が操業を開始した。当時は、特産の杉を原料とした人絹パルプの生産を行っていたが、第2次世界大戦後は、しだいに洋紙の生産に特化していった。1979年には、合併によって王子製紙日南工場となり、現在に至っている⁸⁾。

また吾田は、市制施行前までの中心地であった飢肥・油津の間にあることから、市制施行後は市役所がおかれた。これに伴って、国や県の出先機関も吾田に集中するようになり、商業施設や宅地も増え、市街化が進んだ。この結果、日南市には、それぞれ異なる機能をもつ3つの核がコナベーション(連担化)した細長い中心市街地が形成された⁹⁾。

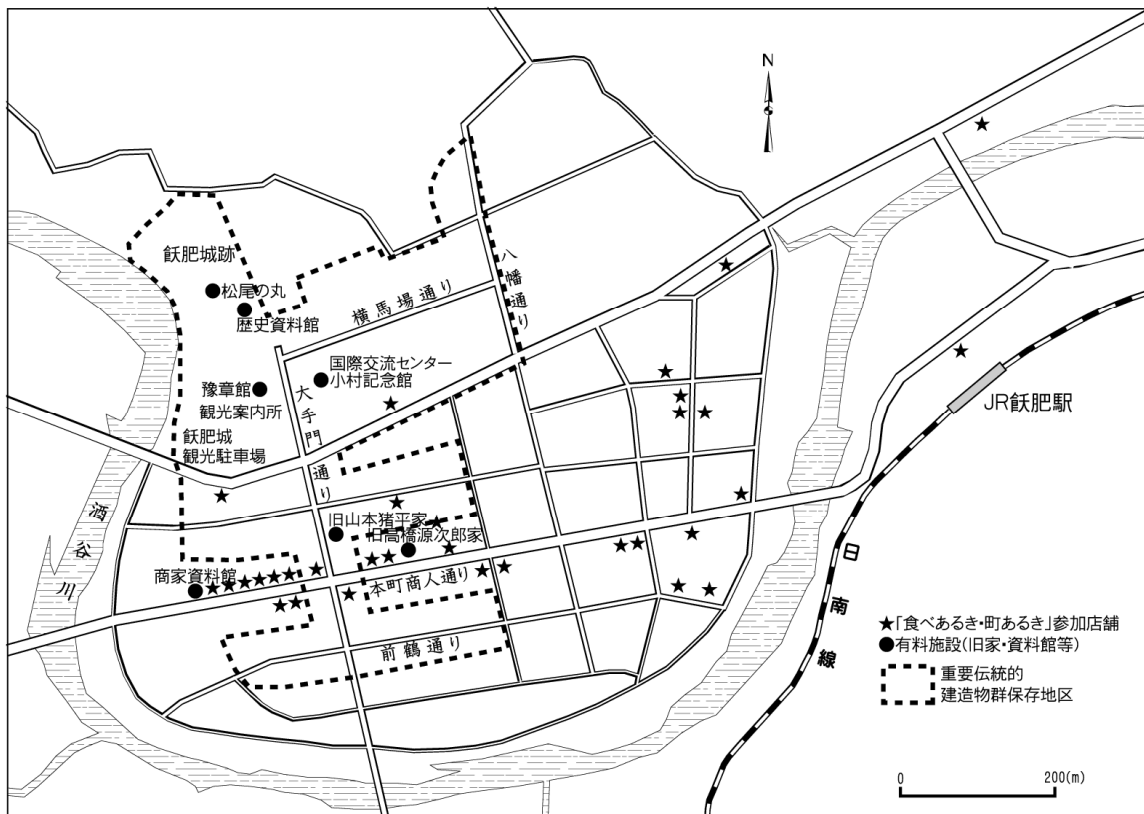


図4 飢肥城下町(助重原図)

2. 観光の動向

宮崎県観光動向調査によると、日南市全体の観光客数は 2008 年が 1,266,406 人、2009 年が 1,789,721 人、2010 年が 1,800,445 人であった。2008～2009 年の急増は、旧北郷町、旧南郷町との合併によるものと考えられ、この調査結果からは市全体の観光客数を時系列的に把握することができない。このため、本節では日南市内の主要観光地・観光施設 7 か所における 2008～2011 年の観光客数をもとに、観光客の動向を分析していく(表 1)。

日南市内でもっとも多く観光客を集めているのは鶴戸神宮で、県内観光地・観光施設のなかでも高千穂峡に次ぐ人気観光地となっている。鶴戸神宮には 2008 年と 2009 年に 100 万人を超える観光客が訪れたが、2010 年は 3 月に発生した牛・豚の口蹄疫、12 月に発生した鳥インフルエンザの影響で 100 万人を割り込んだ(前年比 1.6%減)。さらに 2011 年は 1 月に霧島・新燃岳が噴火し、3 月に東日本大震災が発生したため、1～3 月の観光客数が前年比で 27.0%も減少した。7 月以降は観光客の入り込みも回復したが、通年の観光客数は 865,896 人(前年比 12.5%減)にとどまった。

2010～2011 年における家畜の病害や災害は、他の市内観光地・観光施設における観光客の入り込みにも影響を及ぼしたが、「道の駅」なんごうでは 2010 年の観光客数が前年比 20.8%増の 254,487 人となった。「道の駅」なんごうは、1976 年に県内で初めてマンゴーの試験栽培を行った「宮崎県総合農業試験場亜熱帯作物支場」の隣接地にあり、ここから栽培が広がったマンゴーが南郷地区の特産物となった。しかし、マンゴー栽培が県全域に広がったことで「南郷の特産＝マンゴー」というイメージは失われたことから、同じ試験場で植栽していた南米特産のジャカランダを新たな地域おこしの目玉に据えた。2010 年には、開花期の 6 月に「道の駅」なんごうで開催される「ジャカランダまつり」を、JR の観光特急「海幸山幸」(宮崎－南郷)の運転に合わせて大々的に PR したことが、観光客増に結びついたものと考えられる。

また、飫肥城は 2008 年に 10 万人を超えていた観光客数が、2010 年には 68,426 人まで落ち込んだ。しかし 2011 年には 122,071 人となり、前年に比べて 78.4%も増加した。飫肥では 2009 年から観光特急「海幸山幸」関連事業で「食べあるき・町あるきマップ」を販売して観光客を城下町の店舗に呼び込むための取り組みを進めてきた。2011 年における観光客数の急増は、この取り組みの効果が表れたものと考えられる。なお、「食べあるき・町あるきマップ」に関する取り組みについては第 V 章で詳述する。

表 1 日南市内主要観光地・観光施設における観光客数の動向(2008～2011年)

観光地・観光施設名		2008年	2009年	2010年	2011年
旧日南市	鶴戸神宮	1,034,408	1,005,155	989,318	865,896
	飫肥城	103,692	93,821	68,426	122,071
	サンメッセ日南	184,876	193,781	160,034	151,955
	「道の駅」酒谷	206,700	226,000	211,400	200,200
旧南郷町	「道の駅」なんごう	181,278	210,595	254,487	239,880
	マリンビューワーなんごう	10,895	12,975	11,656	10,051
	港の駅めいつ	225,837	214,296	198,768	201,525

単位:人

資料:日南市資料(宮崎県観光動向調査の原票)をもとに作成

IV 飴肥城下町における観光動向調査とその結果

1. 調査方法

本研究では、日南市における観光の現況を把握するため、飴肥城下町において観光客を対象とした聴きとり調査を実施した。調査は2012年9月22～23日に実施した。対象者は城下町を散策していた観光客から無作為に選び、調査票の質問項目に基づいて調査者が直接対象者に質問する聴きとり調査を実施した¹⁰⁾。対象者が家族連れやグループの場合は、代表者1名に質問し回答してもらった。質問項目は表2に示したとおりである。

表2 観光客に対する聴きとり調査項目

<p>1. お住まいはどちらですか？</p> <p>a. 県外…都道府県名 [] b. 県内…市町村名 [] c. 国外…国名 []</p> <p>2. 日南市に来るまでに利用した交通手段を教えてください《乗り継ぎの場合、複数回答可》。</p> <p>a. 鉄道 b. 自家用車・バイク c. 観光バス(団体貸切) d. 観光バス(パッキングツアー)</p> <p>e. 路線バス f. 飛行機 g. レンタカー h. その他 []</p> <p>3. 今回の旅は何泊のご予定ですか？また日南市には何泊しますか？</p> <p>a. 日帰り b. 1泊 c. 2泊 d. 3泊以上 →うち、日南に泊まる泊数 []泊</p> <p>4. 日南市に宿泊される方におたずねします 宿泊するのはどのような施設ですか？</p> <p>a. ホテル b. ドライブイン c. 旅館 d. 民宿 e. その他 []</p> <p>5. 今回の旅にはどなたと何人で来られましたか？(人数にはご自分も含みます)</p> <p>a. ひとり旅 b. 夫婦・カップル c. 家族と []人 d. 女子会・同窓会 []人</p> <p>e. 同好会・サークル・部活動 []人 f. その他のグループ、団体等 []人</p> <p>6. 日南市に来たのは何回目ですか？ a. はじめて b. 2回目 c. 3回目 d. 4回以上</p> <p>7. 今回の旅で日南市を訪れた目的を教えてください《いくつでも回答可》。</p> <p>a. 飴肥城と城下町の町並み散策 b. 油津の町並み散策 c. 鶴戸神宮参拝</p> <p>d. 自然景観(小布瀬の滝・日南海中公園等)の観賞 e. サーフィン f. スポーツ・農業等の体験</p> <p>g. 郷土料理を食べる →何を食べますか？ []</p> <p>h. 特産品を買う →何を買いますか？ []</p> <p>i. その他 []</p> <p>8. 今回の旅で日南市以外ではどこに立ち寄りませんか？《いくつでも回答可》。</p> <p>a. 青島(鬼の洗濯板含む) b. 西都原古墳群 c. 霧島神宮 d. 都井岬 e. 宮崎神宮</p> <p>f. フェニックス・シーガイア・リゾート g. 天岩戸神社 h. 高千穂峡 i. クルスの海 j. 関之尾の滝</p> <p>k. 生駒公園 l. 平和台公園 m. 日南市のみ n. その他 []</p> <p>9. ご当地グルメとして売り出し中の「日南一本釣りカツオ炙り重」を食べましたか？</p> <p>はい・いいえ・知らない → [はいの場合] どのお店で食べましたか？ []</p> <p>10. 飴肥城下町で使える「食べあるき・町あるきマップ」をつかいましたか？</p> <p>はい・いいえ・知らない→[はいの場合] どの店で使いましたか？(MAPの店舗番号) []</p> <p>感想 []</p> <p>11. 日南市に対する感想・要望があれば書いて下さい(観光施設、宿、地域全体のこと等何でも構いません)。</p> <p>[]</p> <p>[性別] a. 男 b. 女</p> <p>[年齢] a. 20歳未満 b. 20歳代 c. 30歳代 d. 40歳代 e. 50歳代 f. 60歳代以上</p> <p style="text-align: right;">ご回答いただきありがとうございました。</p>

2. 回答者の基本属性

回答者は181名で、うち男性が87名(48.1%)、女性が94名(51.9%)であった。年齢別内訳は、20歳未満3名(1.7%)、20歳代28名(15.5%)、30歳代39名(21.5%)、40歳代23名(12.7%)、50歳代51名(28.2%)、60歳以上36名(19.9%)、無回答1名(0.6%)で、50歳代がもっとも多いものの、幅広い各年齢層が訪れていた。旅行形態別内訳は、ひとり旅が7名(3.9%)、夫婦・カップルでの旅が80名(44.2%)、家族旅行(3名以上)が56名(30.9%)、女子会・同窓会が11名(6.1%)、同好会・サークル・部活動が3名(1.7%)、その他のグループが24名(13.3%)で、夫婦・カップルでの旅と家族旅行が全体の4分の3を占めていた。

3. 調査結果と分析

1) 観光客の居住地

回答者のうち、県外からの観光客は97名で全体の53.6%を占めた。2010年における宮崎県全体の県外観光客比率が36.7%であったことを考えると、飢肥には比較的多くの県外観光客が訪れているといえる。地方別では九州が52名(28.7%)でもっとも多く、なかでも人口が多い福岡県と、隣県である鹿児島県がそれぞれ22名(12.2%)を占めた(図5)。九州以外では近畿、関東地方からの観光客が多く、それぞれ20名(11.0%)、17名(9.4%)であった。一方、中部地方からの観光客は2名(岐阜・愛知県各1名)、中国地方からの観光客も3名(広島県2名、山口県1名)にすぎなかった。

一方、県内観光客は83名(全体の45.9%)であったが、このうち宮崎市が39名、日南市内の他地区が11名、都城市が8名、串間市が2名で、4分の3近くが日南市内の他地区や隣接市町村から来訪していた。なお、外国人観光客は韓国から来訪した1名のみであった。

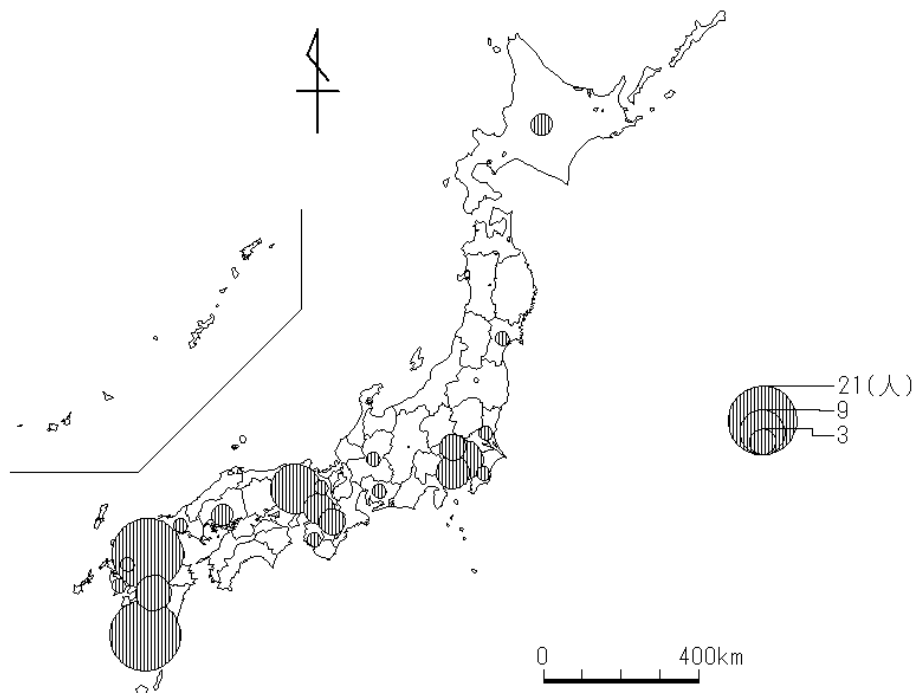


図5 県外観光客の居住地 (聞きとり調査により作成)

2) 利用交通手段

飫肥に来るのに利用した交通手段は、自家用車・バイクが133名でもっとも多かった。このうち4名は関東以北在住者で飛行機も利用したと回答しており、自宅から出発地空港までの間で自家用車を利用したものと考えられる。したがって、自家用車で飫肥まで来たのは実質129名(全体の76.3%)とみなすことができる。

県内観光客は83名中71名(県内観光客全体の85.5%)が自家用車を利用していた。また九州各県からの観光客も52名中47名が自家用車利用であった。近畿からの8名、関東からの3名も自家用車利用と回答したが、これらはカーフェリーで宮崎市や日向市まで来て、そこから陸上を自走してきたものと考えられる。

飛行機利用者は13名で、うち4名は鉄道・飛行機の双方を利用していた。飛行機利用者の居住地は関東地方6名、近畿地方4名、北海道・東北地方2名、中部地方1名で、関東・近畿地方からの飛行機利用者に比べ、中部地方からの利用者が少なかった。宮崎空港発着の航空便は東京(羽田)が19往復/日、大阪(伊丹)が13往復/日なのに対し、名古屋はわずか3往復/日しかないことが主な要因と考えられる。また福岡県から来訪した観光客22名の利用交通手段は、自家用車17名、鉄道3名、路線バスと鉄道+路線バスが各1名であり、福岡-宮崎間に15往復もの航空便が設定されているにもかかわらず、飛行機利用者はいなかった。

鉄道利用者は19名で、うち11名は鉄道のみを利用して来訪していた。11名の居住地は県内6名、福岡3名、東京・北海道が各1名であった。調査実施日は土・日曜日にあたり、観光特急「海幸山幸」が運転されていたことから、県内在住者のなかには「海幸山幸」の乗車を訪問目的の一つとしてあげた人もみられた。

レンタカー利用者は16名で、うち14名が県外在住者であった。また、県外在住者のうち出発地から鉄道・飛行機を利用し、九州内でレンタカーに乗り換えたのは2名(関東・近畿地方各1名)のみで、残る14名は在居住地からレンタカーを利用して来訪していた。遠方の在居住地からレンタカーで来訪する理由としては、①高速道路料金が2014年3月まで「休日特別割引」で半額となっていること、②「休日特別割引」に対抗してカーフェリーも割安料金を設定していることがあげられる。レンタカー利用者が今回の旅行で宿泊する日数は、表3に示したとおり、関東地方の場合2泊、近畿地方の場合3泊以上が多数占めた。関東地方在住者の方が近畿地方在住者に比べ宿泊日数が少ないのは、カーフェリーでの船中泊を宿泊日数に含めていないためと考えられる。

その他の交通機関で来訪した観光客は、路線バスが3名、観光バス(パックスツアー)が2名、観光バス(団体貸切)が1名、自転車・徒歩が3名であった。

表3 レンタカー利用者の宿泊日数

泊数\出発地	関東地方	近畿地方	中部地方
1泊			1
2泊	5	2	
3泊以上	1	5	

単位:人

資料:聴きとり調査により作成

3) 今回の旅行での宿泊日数

回答者181名のうち、日帰りが98名(54.1%)と半数以上を占めた。宿泊日数は1泊44名(24.3%)、2泊18名(9.9%)、3泊以上19名(10.5%)、無回答・未定2名(1.1%)であった(図6)。県外在住者97名にかぎってみると、日帰り22名(22.7%)、1泊39名(40.2%)、2泊16名(16.5%)、3泊以上19名(19.6%)、無回答・未定1名(1.0%)となった。日帰り県外在住者は、3名を除いて九州在住者であり、その大半は高速道路を利用してドライブがてら来訪したものであった。

「日南市内に宿泊する」と回答した観光客はわずか10名で、このうち2名は実家泊であった。市内のホテルや民宿に宿泊するのは8名で、うち1泊が6名、2泊が2名であった。

4) 来訪回数

日南市への来訪回数は、初めてが54名(29.8%)、2回目が30名(16.6%)、3回目が24名(13.3%)、4回以上が66名(36.5%)、無回答が7名(3.9%)で、リピーターが66.3%を占めていた(図7)。県外在住者97名にかぎってみると、初めてが44名(45.4%)、2回目が17名(17.5%)、3回目が15名(15.5%)、4回以上が20名(20.6%)、無回答が1名(1.0%)であった。県外在住者では初めて来た人の比率が高まるものの、リピーターの比率が53.6%と初めて来た人を上回っており、リピート率の高い観光地とってよいであろう。

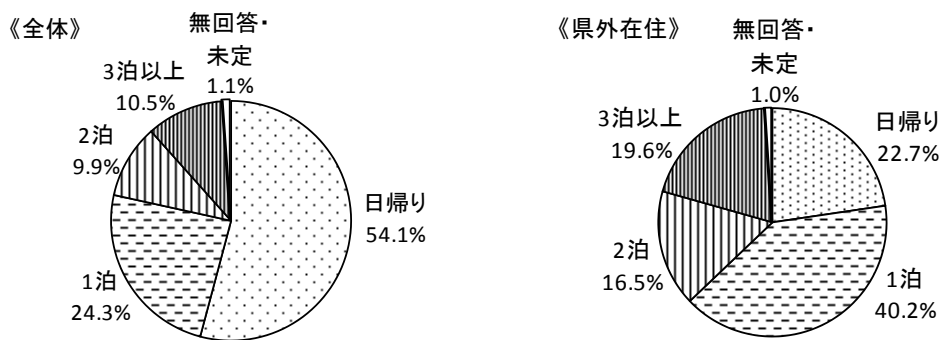


図6 今回の旅行での宿泊日数 (聴きとり調査をもとに作成)

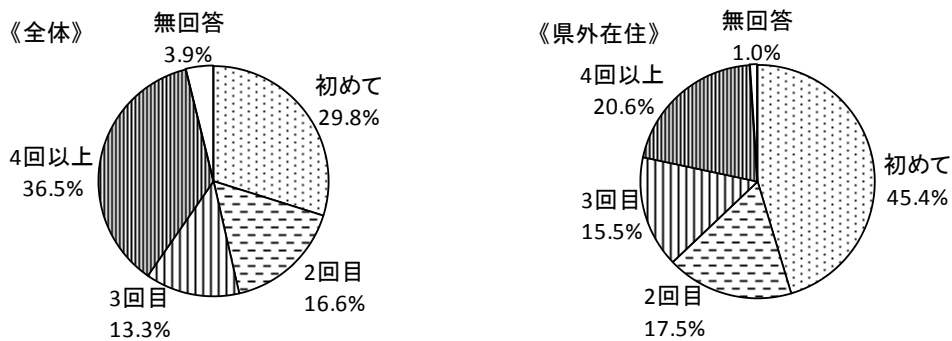


図7 日南市への来訪回数 (聴きとり調査をもとに作成)

5) 訪問目的

この調査は飫肥城下町で実施したため、「飫肥城と城下町の街並み散策」を目的として訪れた観光客が圧倒的に多かった(回答者 141 名)。以下は、「郷土料理」(33 名)、「鵜戸神宮参拝」(32 名)、「特産品」(13 名)、「自然景観」(11 名)、「油津の町並み」(5 名)、「サーフィン」(1 名)の順となった(図 8、複数回答あり)。「飫肥城と城下町の街並み散策」以外で回答の多かった「郷土料理」については、料理の具体名もあげてもらった。

日南海岸は九州随一の伊勢エビ漁場で、9 月～翌年 4 月中旬の漁獲期には、多くの観光客が日南市内の飲食店を訪れる。日南市観光協会でも、伊勢エビ漁解禁に合わせて、9～11 月の 3 か月間「伊勢えび大漁まつり」を開催しており、2012 年は市内のホテルやお食事処 17 店舗が伊勢エビを使った料理を提供していた。調査実施日は「大漁まつり」が始まって 3 週目の土・日曜日であったことから、「伊勢エビ」を目当ての料理としてあげた観光客が 11 名いた。しかし、11 名中 6 名は県内在住者、3 名は九州からの来訪者であり、「伊勢エビ」の存在は九州以外から来た観光客にはさほど認知されていないものと考えられる。「伊勢エビ」というと、ほとんどの人が三重県の伊勢地域をイメージすることも、日南の「伊勢エビ」の認知度が高まらない一因といえよう。

「厚焼卵」と「飫肥天」は藩政期から伝わる城下町の特産物である。「厚焼卵」は、ふつうの卵焼きにはない独特の光沢と甘みがある。「飫肥天」は鹿児島県特産の「薩摩揚げ」に似ているが、魚のすり身に豆腐を混ぜてあるため「薩摩揚げ」に比べて柔らかく、独特の食味がある。「厚焼卵」、「飫肥天」の双方またはどちらかを目当てにしてきた観光客は 15 名であったが、このうち 8 名は県内在住者、4 名は九州からの来訪者であったことから、「伊勢エビ」ほどではないものの、九州以外から来た観光客への認知度は高くないといえる。「厚焼卵」、「飫肥天」が日持ちせず九州以外の各地に持ち帰りにくいことも、県外観光客への認知度が広まらない一因と考えられる¹¹⁾。

「その他」の郷土料理としては、チキン南蛮、冷や汁などがあげられていた。これらは宮崎県内で広く食されている郷土料理であり、県内全域に栽培が広がったマンゴー同様、日南または飫肥特有の郷土料理や特産物とはいえないであろう。

6) 周辺地域での立ち寄り先

回答者が日南市以外で立ち寄った観光地の上位には、青島(回答者 40 名)、都井岬(13 名)、霧島神宮(12 名)、高千穂峡(10 名)、宮崎神宮(9 名)があがった(図 9、複数回答あり)。高千穂峡以外は、いずれも日南海岸に面した地域に位置しており、これらと日南市内の観光地とをあわせて、

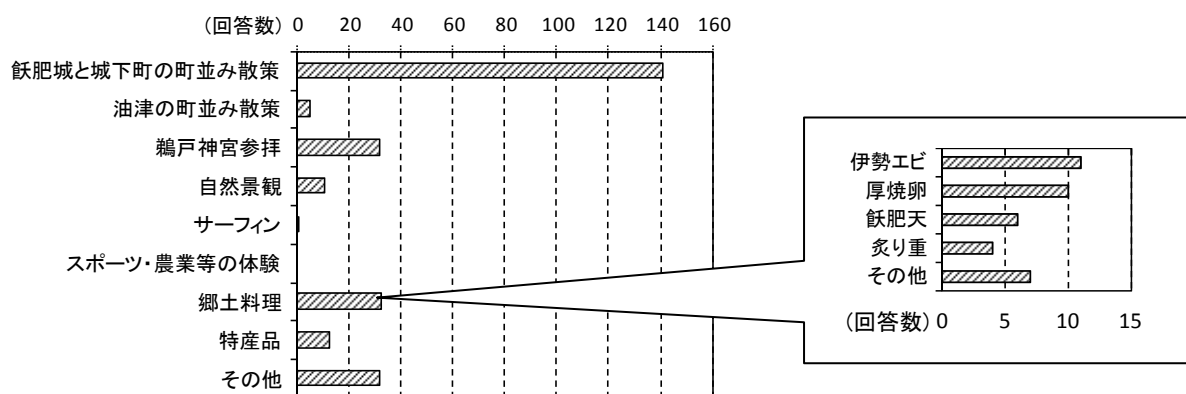


図 8 訪問目的 (聴きとり調査をもとに作成)

日帰りや1泊の旅程で周遊するケースが目立った。

高千穂峡は日南から離れた宮崎県北部の山間地にあるが、前述のように宮崎県でもっとも多く
の客を集めている観光地である。高千穂峡を訪れた観光客は、青島や天岩戸神社にも訪れており、
これらの観光地を2泊以上の旅程で周遊しているケースが多くみられた。

一方、日南市のみを訪れた観光客も64名いた。これらのうち38名は県内観光客、15名は九州
地方からの観光客であった。また、「伊勢エビ」、「厚焼卵」、「飫肥天」を食べることを目的として
来訪した観光客の大部分が含まれていた。こうした観光客は一つの目的地に行って帰ってくるだ
けなので、広域的な経済効果は小さい。しかし、日南にとっては長時間滞在して多くのお金を落
としてもらうことが期待できる観光客であり、これらをどのように満足させてリピートに結びつ
けるかが、観光振興にとって大きなカギといえよう。

7) 新・ご当地グルメ「日南一本釣りカツオ炙り重」について

第Ⅲ章でも述べたように、油津港や目井津港は全国有数のカツオ一本釣り漁業基地となってい
る。カツオ一本釣り漁業のうち、遠洋カツオ一本釣り漁は季節により漁場や基地が移動する。一
方、近海での一本釣りで収穫したカツオは、年末年始を除き一年中油津や目井津に水揚げされる。

日南市一帯では従来、油津港に水揚げされたカツオを刺身やタタキにするか、それに汁をかけ
「かつおめし」にして食べていたが、観光振興の一環としてカツオを用いた新しいメニューを開
発しようという機運が高まった。2010年には、じゃらんnetと提携して、新・ご当地グルメプロ
デューサー・ヒロ中田氏がプロデュースした「日南一本釣りカツオ炙り重」を開発した。「日南一
本釣りカツオ炙り重」は、カツオを炙って食べるという新しい発想が多く観光客に受け入れら
れ、参加11店舗で2010～2011年の2年間に計6万食を提供するにいたった。

今回の聴きとり調査では、「日南一本釣りカツオ炙り重」が観光客にどの程度認知され、食べら
れているのかについても尋ねた。この結果、「食べた」と答えた観光客は22名(12.2%)にすぎな
かった。一方、「(存在を知っているが)食べなかった」と答えた客は92名(50.8%)、「知らない」
と答えた客も65名(35.9%)にのぼった(図10)。また「食べた」と答えた22名のうち13名は県
内在住者、5名は九州からの来訪者であった。こうした点を考えると、「炙り重」も九州以外から
来た県外観光客にはあまり認知されていない可能性が高い。

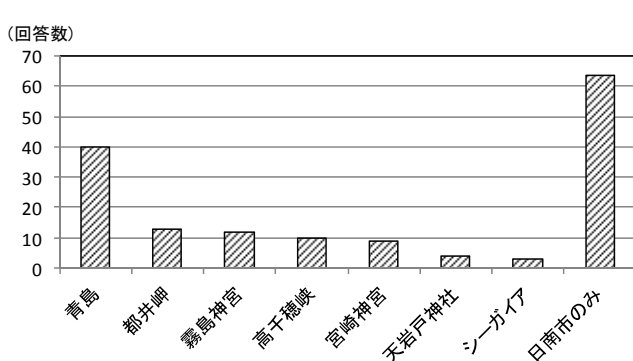


図9 日南市以外で立ち寄った観光地 (聴きとり調査をもとに作成)

注: 回答数が2以下の観光地は省略した。

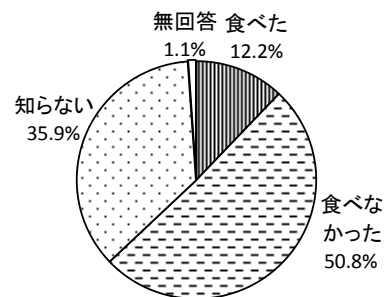


図10 「日南一本釣りカツオ炙り重」について

(聴きとり調査をもとに作成)

V 「食べあるき・町あるきマップ」への取り組みと評価

1. 取り組みの概要

近年、飢肥には城だけで約10万人、全体では年間30万人程度の観光客が訪れている。しかし、飢肥城を訪れる観光客は観光駐車場で自家用車や観光バスを降り、城内施設を見学し終わるとすぐに他の観光地に向かってしまう場合が多かった。このため、城下町の商店街まで足をのばす観光客は少なかった。飢肥城下町保存会では、こうした状況を改善するため「食べあるき・町あるき」の取り組みに着手した。この取り組みは「食べあるき・町あるきマップ」に商店街で使える商品引換券をつけて有料で販売するもので、岐阜県郡上八幡市での先行事例を参考にしながら飢肥に適したシステムを独自に構築した。

マップには5枚の引換券が印刷されている。購入した客は町あるきをしながらマップに掲載された参加店舗をめぐり、引換券と欲しい商品とを交換する。料金は7つの有料施設(①「豫章園と庭園」、②「松尾の丸」、③「歴史資料館」、④「小村記念館」、⑤「旧山元猪平家」、⑥「商家資料館」、⑦「旧高橋源次郎家」)の入館料込で1,000円となっている。有料施設に入る必要がない場合は、「食べあるき」の引換券5枚のみで600円である。この場合も⑤～⑦の施設は無料で入場できる。有効期間は、宿泊して2日間町あるきができるように発行日の翌日までとしている。

取り組みは、2009年4月29日に16店舗が参加して暫定的にスタートした。同年10月3日にはマップをわかりやすいものにリニューアルし、参加店舗も39に増えた。参加店舗はその後増減があり、現在は36店舗となっている。

マップは城下町保存会が作成、販売し、商店会事務局が引換券の換金事務を行っている。また日南商工会議所は旗の作成等を行い、日南市観光協会は緊急雇用対策事業によるマップ販売要員(臨時職員)の雇用や、観光特急「海幸山幸」の運行に合わせて走る飢肥・南郷周遊バス「日南めぐり号」の運行補助等を行っている¹²⁾。

2. 観光客の利用状況と評価

城下町で行った聴きとり調査では、「食べあるき・町あるきマップ」の利用状況についても観光客に尋ねた。この結果、マップを「使った」と答えた観光客は70名(38.7%)であった。一方、「(存在を知っているが)使わなかった」と答えた客は85名(47.0%)、「知らない」と答えた客は25名(13.8%)であった(図11)。

日南市に対する感想・要望(フリーアンサー)をみると、マップを「使った」と答えた観光客21名が食べあるきやマップに言及しており、その大半が「マップがわかりやすかった」、「食べあるきが楽しかった」という肯定的意見であった。「マップだけでは移動時間がわからない」、「案内をもっと詳しくしてほしい」、「もっと県外客を呼ぶべき」といった意見もあったが、これらの意見を書いた人々も「食べあるき・町あるき」の取り組みは好意的に評価していた。

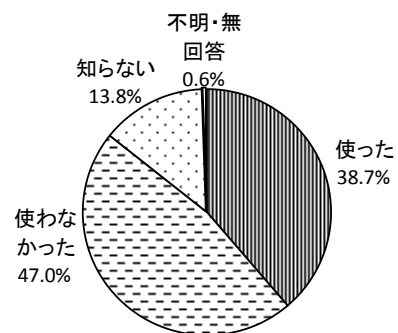


図11 「食べあるき・町あるきマップ」
利用の有無 (聴きとり調査をもとに作成)

表4 「食べあるき・町あるきマップ」に参加してよかったこと

選択肢	回答数
a. 「食べあるき」対象以外の商品も買っていつでももらえるようになった	10
b. お客さんと触れあう機会が増えた	16
c. 再び来てくれるお客さんが増えた	10
d. 活性化に向けてみんなで活動することで、地域の結束が強まった	3
e. その他	5
商品(味)の良さを知ってもらえる、PRできる	2
観光客が増えた	

資料:聴きとり調査をもとに作成

3. 参加店舗の評価

今回の調査では、「食べあるき・町あるきマップ」に対する参加店舗の意見・評価も聴取し、33軒から回答を得た。『食べあるき・町あるきマップ』に参加してよかったこと」という質問に対する回答は表4のとおりで、観光客の増加、お客さんと触れあう機会の増加、商品のPRに関しては効果が得られたと感じている店舗が多かった。

『食べあるき・町あるきマップ』に参加して、困っていること、不都合と感じたこと」という質問への回答(フリーアンサー)では、「店舗どうしが離れていて不便」、「食べあるきのみで他の商品は買わない」、「有料メニューを食べにきたお客さんに迷惑がかかる」、「引換券の換金額が安く赤字」、「人手不足で食べあるきに対応できない」といった意見が目立った。しかし、これらの意見を述べた店舗でも、多かれ少なかれ商店街の現状には危機感を抱いていた。『食べあるき・町あるきマップ』以外で、町の活性化のために取り組んだらよいと思うこと」という質問への回答(フリーアンサー)でも、「(現状では1軒なので)飲肥に宿泊施設をつくるべき」、「食べながらくつろげるスペースが必要」、「町ぐるみでの活動が必要」といった具体的意見のほか、「具体的な案は浮かばないが、何か行動を起こさないと!」といった意見が数多くみられた。

VI おわりに ー観光振興に向けた課題ー

本研究では、日南市、とくに飲肥城下町における観光の現況を観光客への聴きとり調査結果をもとに考察した。さらに「日南一本釣りカツオ炙り重」や「食べあるき・町あるきマップ」等への取り組みについても考察し、それらが観光客にどのように評価されているのか検討した。また、「食べあるき・町あるきマップ」については、取り組みに参加している店舗からも意見を聴取し、店舗側の評価も明らかにした。ここでは、以上の結果をもとに観光振興に向けた課題を検討し、若干の解決策を提案したい。

飲肥をはじめとする日南市全域は、地元の観光関係者も指摘するように典型的な通過観光地である。実際、本研究調査で日南市内に宿泊したと回答した観光客は、181名中10名に過ぎなかった。宿泊者が少ない原因としては、観光地である飲肥に宿泊施設が1軒しかないこと、宮崎市での宿泊者が多いことなどが考えられるが、油津、南郷、北郷温泉にある比較的大きな宿泊施設と飲肥、鶴戸神宮との交通アクセスが悪いことも重大な要因と考えられる。

その一方で、「海幸山幸」のダイヤに合わせて運行している「日南めぐりバス」は週末にもかかわらず、乗客はわずかであった。このバスを「海幸山幸」で来る日帰り客のためだけに運行するのではなく、朝夕は油津、南郷、北郷温泉に立ち寄って、車に乗らない宿泊客にも対応するよう

な工夫をし、宿泊施設、バスの運行事業者、観光地等が共存共栄の道を探ることが必要であろう。

「日南一本釣りカツオ炙り重」や「食べあるき・町あるきマップ」は、地域資源を巧みに活かした取り組みである。しかし、「炙り重」を食べたり「食べあるき・町あるきマップ」を利用したりした観光客の大半は、宮崎県や九州各県から来訪しており、せっかくの良い取り組みが九州以外から来た観光客には十分に認知されていないことがうかがえた。

これらについては、まず取り組みの存在を広く知らせるしくみが必要である。現在、「日南一本釣りカツオ炙り重」や「食べあるき・町あるきマップ」の情報は、日南市観光協会のホームページや飫肥城下町保存会のブログ等で公開されているが、より多くの人に認知してもらうためには、人から人へと情報が広がりやすいSNSやツイッターを利用することも考える必要があろう。

また、「炙り重」や「食べあるき・町あるきマップ」はそれぞれの参加店舗が提供する食事や商品に工夫を凝らしているが、個々の取り組みが現在の情報媒体からはうまく伝わってこない。参加店舗が競争意識をもって商品を開発し、それぞれの商品の特徴を情報媒体で伝えていけば、「今度はあの店に行ってみよう」、「宮崎市に行くついでに日南まで足を伸ばそう」といった観光客の意欲をかきたてることができるのではないだろうか。

本稿は平成24年度「専門演習Ⅰ」（3年助重ゼミナール）で実施した日南市の観光客動向調査の成果をもとに作成した。現地調査および資料収集にあたっては、宮崎大学教育文化学部の中村周作先生、日南市産業経済部商工観光課の黒岩 保雄課長、日南市観光協会の濱中 伸太事務局長、鹿児島県立武岡台高等学校の神宮公平先生に多大なご協力を賜った。また、宮崎県商工観光労働部観光交流推進局観光推進課の野間 純利課長補佐からも資料をご提供いただいた。末筆ながらここに記して厚く御礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 「鬼の洗濯板」は「青島の隆起海床と奇形波蝕痕」として国の天然記念物に指定されている。また、青島ではビロウの大群落をはじめ、熱帯性・亜熱帯性植物が27種確認されており、北半球では最北の亜熱帯植物群落となっている。この植物群落は「青島亜熱帯性植物群落」として国の特別天然記念物に指定されている。
- 2) 森津千尋、メディアが描く新婚旅行ー1960年代～1970年代の宮崎新婚旅行ブームを事例にー、日本マス・コミュニケーション学会2012年度春季研究発表会研究発表要旨
- 3) 下記文献 p. 187 には「1974年には全国の婚姻者の約4割近くが宮崎を新婚旅行先として選択したといわれ」との記載がある。
財団法人九州経済調査協会編『九州産業読本』（2007）西日本新聞社、321ページ
また宮崎県観光推進課「平成22年宮崎県観光入込客統計調査結果」の「宮崎県観光のあゆみ」（年表）には、「全国の新婚旅行約100万組のうち37%の37万組が宮崎市を訪れる」との記載がみられる。
- 4) 油津の気象データは、いずれも気象庁発表の平年値による。統計期間は1981～2010年の30年間である。
- 5) 飫肥での伝統的建造物の保存修理事業や、建造物以外の修景事業等については、以下の文献に詳述されている。
岩動志乃夫、土地利用変化にみる日南市のまちづくり、宮崎女子短期大学紀要22(1996)、1-10
- 6) 岩動志乃夫、三つのまちが連担化した都市 日南市、『九州 地図で読む百年』（平岡昭利編、1997）古今書院、pp. 137-142
- 7) 農林水産省資料(2012.4.26公表)による。
- 8) 王子製紙、工場紹介・王子製紙日南工場、紙パ技術協会誌47-4(1993)、495-504
- 9) 前掲6)
- 10) 観光客が自分で記入することを希望した場合は、観光客に質問項目を記載した調査用紙を渡し、記入してもらった。
- 11) 現在は憐元祖および天本舗が宮崎空港に出店し、「おび天」が人気土産品の一つとなっているが、賞味期限は製造後5日間である。なお「おび天」は同社の登録商標となっており、一般的には漢字で「飫肥天」と記載する。
- 12) 実質的には、日南市の観光関連事業として実施されている。